



秋の調べ

峰月 伴

大学からの帰り道、紅く染まった葉がゆっくりと風に揺られて落ちて来た。葉の行方を目で追うと、ゆらゆらと地に向かう紅い葉は、大野^{おおのまさき}真紀の足元に舞い降りた。

ついこの間まで緑だった葉が、もうこんなに紅く色付いている。それを間近で見た真紀は、もう秋だなと感じた。

道に舞敷かれた落ち葉を踏みながら、玄関を開けた。

「ただいまぁ」

靴を脱いで、いるであろう母に声を掛けた。すると、リビングのドアを開けて母の真弓が顔を覗かせた。

「あら、お帰り」

「これから、悟んトコ行ってくるよ」

「またお勉強会？」

「その言い方やめろよ。家庭教師って言ってくれない？」

「はいはい。家庭教師ね」

クスクス笑う真弓を横目に、真紀は二階にある自分の部屋に向かった。部屋に入り、背負っていたショルダーバッグをベッドに放り投げた。その中から財布と携帯を取り出して、ジーンズのポケットに突っ込んだ。

軽い身なりで部屋を出た真紀は足早に階段を下り、「いってきまあす」と真弓に声を掛けて玄関を出た。

「マキちゃん、おかえり」

歩いていると、背中から声を掛けられた。その声が誰だか分かっていたので、真紀は溜息を吐きながら振り返った。

「悟！ マキちゃんって呼ぶなっていつも言ってるだろ？」

「何で？ いいじゃん。マキちゃんにぴったりだよ」

真紀を『マキちゃん』と呼んだのは、幼馴染の田辺悟だった。高校の帰りで、制服姿だった。ブレザーを着崩していて、注意すれば「これがカッコイ一の」と言い張っていた。

悟は二歳下で、生まれた時から隣に住んでいた。人懐こい悟だったが、特に真紀に良く懐いていた。それが今ではもう高校二年になっていた。

にこにこ笑いながら、悟は真紀の肩を引き寄せた。

「こら、悟！ 重いだろ、肩組むな」

「いいじゃん、マキちゃん肩組みやすいんだよね」

「それは、俺がチビだって言ってるのか？ ほら、すぐお前ん家なんだから。鍵開けろ」

はい、とふて腐れながら悟は肩に掛けていたスクールバッグから鍵を取り出して、ガチャリと鍵穴に差し込んだ。

「はい、どうぞ」

「おじゃましまーす」

家の中はシンとしていて、誰もいない事が感じ取れた。

「おばさんいないんだ」

「んー、何か友達とどっか行ってくるってメール入ってた」

「そう」

悟の後を追い、真紀は二階にある部屋へと向かった。階段を上り、右手が悟の部屋だった。

「何か飲み物持ってくるから待ってて」

「分かった」

悟の部屋はいつ来てもごちゃごちゃしていた。読んだ雑誌は開いたまま床に置かれ、脱いだ服はベッドに投げ捨てられ、これぞ男の子の部屋という感じだった。

俺だって、ここまでひどくはないけどな……。

「おまたせ。麦茶しかなかった……」

「何でもいいよ。さんきゅ」

トレイにグラスを二つ乗せて部屋に入って来た。一つを真紀に渡して、もう一つを机の端に乗せた。

「悟さ。こうゆう事は気が利くしまめなのに、何で部屋はこんな有様なんだよ」

「えー。だって、めんどくさいじゃん」

めんどくさい。ああ、そうだ。悟はそういうやつだった。

「……そんなんじゃ、彼女出来ないぞ」

「別に、いらねえからいいよ……」

悟の声のトーンが急に下がった。それは、機嫌が悪くなったサインだった。その様子を見て、真紀はクスリと笑った。

「……何で笑うんだよ」

「だってお前さ。機嫌悪いの丸分かりだよ」

「マキちゃんが、彼女出来ねえとか言うから……」

「ごめんごめん」

拗ねている悟の頭を撫でた。それで機嫌が良くなる所は、子供の時と同じで可愛いと思った。

「それじゃ、やるか。この間の小テスト、どうだった？」

「んー、これ」

バッグからテスト用紙を取り出して机に置いた。点数は七十六点だった。

「お！ 苦手な数学にしては、良い点取れたじゃないか」

「ん……。一応、平均点以上だった」

照れくさそうに悟はそう言った。

「やったな！ これなら期末もこれくらい取れるよ。それじゃ、この辺の間違えたやつ潰していこう」

勉強が嫌いでいつも赤点すれすれだった悟が、こうしてちゃんと勉強してくれているのが嬉しかった。

中学までは一緒の学校に通っていたから、手の届く範囲で助けてあげられた。それも、真紀が卒業してしまえば手を伸ばすのは難しかった。その後、良くない連中と付き合い荒れていたと何度も聞いた。その度に、悟を訪ねたが取り合ってもらえなかった。

こうして、また昔みたいに手を伸ばす事が出来るなんて思わなかった。

「悟さ、学校はどう？ 楽しい？」

「ん？ まあ、楽しいことばっかじゃねえけど。たまに他校から絡まれるし。でも、あほなやつばっかで楽しいよ」

「それなら、良かったよ」

「でも、マキちゃんがないから淋しいよ」

「え？」

悟の横顔が、どこか悲しげに見えた。

「だって、マキちゃん大学が忙しそうだからさ。俺に全然構ってくれないじゃん」

「構ってって。こうやって勉強見てるだろ？ 構ってるじゃないか」

「……そうじゃなくてさ」

悟の言葉が詰まった。

「どした？」

「……別に」

何でもないと、呟いた。それを誤魔化すように、数学の教科書のページをめくった。

「ここ、よくわかんねえの」

「ああ、ここは……」

悟は一体何が言いたかったのか、気になった。いつも言いたくない事や言いつらい事は、口籠って誤魔化した。

言いたい事ははっきり言えばいいのに。俺に、何を隠してんだか……。

相談されない事が、淋しく思えた。俺じゃ、頼りないかな。そんな風に感じた。

「あー、そっか！ この公式に当てはめてやればいいのか」

「そう。これだけ覚えとくといいよ。他のにも応用出来るから」

「やっと解けた！ さすがマキちゃん。教えんのうまいね」

「そうかな？ そんな風に言ってくれるの、悟だけだよ」

悟が運んで来た麦茶の入ったグラスを手に取り、一口飲んだ。渴いた喉が一気に潤った。

「マキちゃん、他の人にも教えてんの？」

「いや、こうやって教えてるのは悟だけだよ。まあ、たまに後輩とかが連絡してくるけど」

そう言うと、悟は黙った。

「……悟？」

「マキちゃんはさ、誰にでも優しいよね。これじゃ、すぐに彼女とかできちゃうんじゃないの？」

」

「そうか？」

「そうだよ。女はさ、優しい男が好きでしょ？」

悟の言いぐさが、拗ねた子供の口調だった。

「何、拗ねてんだよ？」

「……拗ねてなんかねえよ」

「拗ねてんだろ？ そうやって、すぐふて腐れる。悟はいつもそうだよ。俺には言いたい事は何にも言わないんだ」

「……マキちゃんさ」

「うん？」

俯いている悟の顔を横から覗き込んだ。

「キスした事ある？」

「……は？」

唐突な質問に呆然とした。

「彼女、出来た？」

「何だよ、その質問」

「だから、大学で誰かと付き合ってるの？」

悟は一体何が知りたいのか。真紀には、悟の考えている事が分からなかった。この質問に、どんな意味があるのだろうか。

「……彼女なんていないよ。そりゃあ、高校と違って可愛い子とか色気ある子とかいるけどさ。まあ、俺みたいな普通の男になんか眼中にないよ」

自分で言って、何だか悲しくなった。これじゃ、自分からモテないと言っているじゃないか。真紀は苦笑いを隠す事が出来なかった。

「ああ、もう！ 何言わせるんだよ……。自分がモテないの、再確認しただけじゃないか」

急に恥ずかしくなった真紀は、それを隠すように頭をぼりぼりと掻いた。

「じゃあさ、マキちゃんて童貞？」

「お前っ！ さっきから何なんだよ！ 経験がないとダメなわけ!!」

羞恥で身体が一瞬で熱くなった。

年下の悟に、キスの経験すらないのが知られるなんて思いもしなかった。

「ダメじゃないよ。むしろよかったよ」

さっきまでふて腐れて子供のようにだった悟が、急ににこにここと笑い出した。その様子を見て、上がった体温が少しだけ下がった気がした。

「……よかったって何だよ」

「ねえ、マキちゃん。俺とキスしようよ」

悟の言葉を上手く飲み込めなくて、真紀は思わず悟の顔をじっと見つめた。

「え、何？」

「俺と、キスしてよ」

「……何言ってるの？ え？ そうゆうの流行ってるの？」

「違うよ。マキちゃんのファーストキスを俺に頂戴って言ってるの！」

何がどうなってこうなったんだ？ 真紀は、混乱する思考をどうにも出来なかった。誰か、答えを知っているなら教えてくれと本気で思った。

「ね、黙ってるって事はいいって事？」

思考回路が停止していた真紀の肩を、悟はいつの間にか引き寄せていた。気が付けば二人の距離は近づいていて、悟の顔が目の前にあった。

「え？ ちょっと、待てっ」

「無理。待てない」

抵抗しようと悟の肩を腕で押したが、それより早く悟の掌が真紀の頬を掴んだ。言葉を発する間もなく、唇は塞がれた。まるで、肉食獣に捕まってしまった小動物になった気分だった。

「ん……」

貪られる唇から吐息が漏れた。それが自分のものだと分かって、身体が熱い。

掴まれた腕を振り解こうとしたら、強引に引き寄せられた。悟の腕が真紀の背中に回り、それを感じて身体が脈打った。

息をしたくて薄く唇を開くと、その間を悟の舌が入って来た。侵入を止めるどころか、悟の舌が真紀の舌を絡め取った。

「んんっ！」

何で悟とキスしてんだろう。これは本当に悟なのか。今、自分がどうなっているのか分からない。何だか、お腹の辺りが熱い。真紀は、抵抗が出来なかった。

「マキちゃん……」

いつもよりトーンの低い、どこか大人びた悟の声が真紀の耳をくすぐった。真紀を見つめるその目が、熱を帯びていた。

「な、に……？」

「俺、もう我慢出来ない」

悟に引っ張られて、真紀はベッドに押し倒された。

「なっ、悟！ 何、すんだよ」

「限界……」

「え？」

悟は真紀の上に跨った。そして、制服のネクタイを外した。

「悟……」

悟の思いつめた表情を見て、心臓が激しく脈を打った。

「マキちゃん。ごめんね」

両腕を掴まれ、抵抗も虚しく片手で押さえつけられた。手首を外したネクタイで縛られ、その先をベッドのフレームに括り付けられた。

「悟っ！ やめろ！」

ジタバタと身体をくねらせたが、体格差のせいであっけなく組み敷かれてしまった。どんなに抵抗しても、悟の力を跳ね返す事は出来なかった。そうこうしている内に、履いていたものはあつという間に脱がされた。

「やめろ！ 悟っ！ これ解けよ！」

真紀の言葉を見殺して、悟は唇を寄せた。唇を啄み、首筋を舌が這った。

「やだっ……」

服をめくり上げられ露わになった肌を、悟の掌が触れた。薄い胸を撫でまわし、胸の先を弄んだ。

「んっ……」

感じた事のない感覚に、びくりと身体が跳ねた。

「感じる？」

「やめ、」

指で摘まれた胸の先に悟は舌を這わせた。ねっとり舐め回す舌の感触が、真紀の身体を震わせた。

「さ、とる……、やあ……だ」

「ここはそうでもないでしょ？」

熱を帯びた真紀の芯を、悟は指で弾いた。

「あう！」

隆起した芯を悟は迷いもなくその口に咥えた。唾液を絡ませて、舌を這わせてはまた口に咥えた。

「んっ、ああ……！」

真紀の芯から白濁の蜜が滴った。

「マキちゃん、早いね」

悟の声が聞こえた。けれども、身体感覚と考えが追いつかなかった。

「ねえ、マキちゃん。もっと気持ちいい事してあげる」

くすりと笑った悟は、真紀の肢に手を掛けてぐいと持ち上げた。

「何、やだ……」

持ち上げられた下半身を舐めるように見られ、今すぐに隠したくなった。悟に見ないでほしくて、身を振った。

「マキちゃん、大人しくしててよ」

身体の内を悟の指が触れた。そして、強引に奥を指が突いた。

「うっ！ 痛いつ……いやだ、あ」

真紀の蜜で濡れた奥を、悟の指が入っては中をかき混ぜる。固く締まった奥を弄られ痛いだけのはずが、急に違う波が真紀を襲った。震える真紀を見て悟は中をまさぐり続けた。

「ん、ああ……！ あっ、ああ……！」

甘い疼きが身体を巡る。

「もう入れるね……」

指を抜いた悟は、隆起した柱を下着から出し軽く扱いた。充血した柱を真紀の解れた奥にこすり付け、それを押し入れた。

「うあっ！ ああ、やめ、ろ……。むり……」

指とは比べ物にならない悟の柱が、真紀の中に入ろうとしてきた。あまりの衝撃で身体が強張り、思わず布団を握り締めた。

「マキちゃん、力抜いて」

痛みに喘いでいると、悟の手が芯を弄んだ。上下に扱かれて、先から蜜が零れた。

「んあっ」

少しの快感に身体が解放された瞬間に、悟の柱が奥を破った。遠慮なく入って来たそれが真紀の核を突いた。

「あ、あ！ ん、んあ……！」

ゆっくりと悟は己の腰を揺らす。その小さな揺さぶりが、真紀を快樂へと招いた。

悟の息遣いが聞こえた。そして、中を突く熱を感じた。

「マキちゃん、中でイクから……」

そう呟くと、悟の腰が急に激しく動いた。柱が何度も奥を出入りし、核を刺激する。そして、電撃のような官能が真紀に降り掛かった。

「はう！ あ、ああっ……、や、ああ————！」

悟の柱が、真紀の中で熱い白液を放った。奥から零れ落ちた白い愛液が、真紀の双丘へと流れた。

真紀の芯からも白濁の蜜は滴り、身体を伝った。

「……マキちゃん、好きだよ」

悟の腕が伸びて、真紀の身体を俯せにさせた。腰を掴まれたと思ったら、そのまま悟は突き挿した。

「は、ああ……！」

激しく腰を落とされ、身体は敏感に震えた。

「さと、るっ、やめて……。も、やあ……」

加減なく身体を貪られて、真紀の意識は途中で消えていった。

あの日、なぜあんな事になってしまったのか。真紀には分からなかった。

生まれた時から傍にいて、真紀の後を付いて回った悟がなぜ。一体どこからそうってしまったんだ。

「分かんない……」

あの日以来、悟には会っていない。あんな事されてどう怒っていいのか、どう許してあげればいいのか答えが見つからない。

消えかかる意識の中で「好きだ」と聞こえた気がした。けれども、曖昧な記憶を信じる事は出来ない。

「俺にどうしろって言うんだよ……」

ポケットに入れていた携帯がザーザーと震えた。着信は悟だった。ディスプレイを見て、真紀はそのままたポケットにしまった。

毎日悟からメールに電話と着信があった。今日まで全て無視し続けている。

大学を終えた真紀は、駅前のカフェで時間を潰していた。この二週間、ずっとそうしていた。万が一にでも悟と帰りが被ってしまったら、どんな顔をして会えばいいか分からない。気持ちの整理が出来なかった。

無理やりとはいえ、快樂を感じてしまった自分も確かにいた。それを、自分の中でどう処理すればいいのか。

「……ああ、もう！ 何であんな事すんだよ」

溜息を漏らした。分かっていたが、その後の言葉が見つからなかった。

「ごめん」

俯いていた真紀は、その声に反応して顔を上げた。

「マキちゃん……。ごめん」

悟の声だと知っていて、振り向けなかった。それどころか、身体が動かなかった。

「マキちゃん、こっち向いてよ……。ほんとに、ごめんなさい」

沈んだ声が耳の奥を通して、身体に入り込む。

何だよ、そんな声出すなよ……。

振り向く代わりに、飲んでいたグラスを飲み干して立ち上がった。

「……帰るぞ」

返却カウンターにグラスを置いて、カフェの自動ドアをくぐった。しばらくして悟の足音が聞こえた。

家までの道のりを、二人共無言で過ごした。そんな中で、真紀の後を付いてくる足音が少しだけ愛おしく感じた。

真紀の家の前に着き、玄関の前で足を止めて後ろを振り返った。数歩後を歩いていた悟はびっくりして立ち止まった。その姿が、子供の頃の悟と重なった。

ああ俺、悟のこの姿に弱かったなあ。

怒られると分かって萎れた悟を、子供の頃からずっと見て来た。その様子は愛らしくて、怒っていた気持ちはいつの間にかどこかに消えていた。今もそうなんだだと、真紀は気が付いた。

「……部屋、上がる？」

何を言われるかと下を向いて固まっていた悟は、不思議そうに瞬きしながら顔を上げた。

「俺に、何か言う事あるだろ？」

しばらく悟を見つめた。真紀の言葉をようやく飲み込んだ悟は、こくりと頷いて真紀の後を追った。

家に入ると、真弓は買い物に出かけていていなかった。狙ったわけではないが、タイミングの良さに感謝した。

「先に部屋行ってろよ」

「……ん」

しぶしぶ頷いた悟を見送り、真紀は冷蔵庫を開けて飲み物を見て炭酸飲料を取り出してグラスに注いだ。それをトレイに乗せて、悟の待つ部屋に向かった。

ドアを開けると、真紀の勉強机のイスに座っていた。机にグラスを乗せて、もう一つのグラスはそのまま持ってベッドに座った。

お互いにグラスを傾げる音だけが部屋に響いた。

グラスを半分空けた悟が十分すぎる間をおいて、ぽつりぽつりと言葉を重ねた。

「……この前は、ごめん……。あんな事して、ごめんなさい。……酷い事が、したかったわけじゃなくて。ほんとは、全然あんな事するつもりなんて……なくて。だから……俺……」

眩く声が少しだけ震えているのが分かった。悟も、真紀のようにどうしたらいいのか、ずっと悩んでいたんだ。その気持ちが、分かった。

「……悟。俺は、お前の気持ちが知りたい」

「え？」

「何で、キスした？」

「それは……」

「何で、俺を抱いた？」

「だから……」

口の中で出来ている言葉を待った。悟の口からちゃんと聞かなければいけない。そうじゃないと、真紀自身許す事が出来なかった。

「俺は男だから、レイプされたなんて思ってないよ。けど、襲われた事実は消えない。相手が悟だから、恐怖を感じたわけじゃないけど。でも、どうしてあんな事をしたのか理由を知りたい」

項垂れていた悟が真紀を見つめた。一時見つめ合い、悟はイスから立ち上がり真紀の前にしゃがみ込んだ。そして、もう一度真紀を見つめた。

「……マキちゃんが、好きなんだ。生まれた時からずっと傍にいて、俺の前を歩くマキちゃんが大好きなんだ……。ずっと、俺だけを見てほしかった。誰にも取られたくなかったんだ」

見つめてくる瞳から一滴の涙が零れた。透明な滴は頬を伝って、顎に流れて床に落ちた。頬に走った涙の痕を、真紀は拭った。

「今、悟が愛おしいよ」

「え……？」

「誰にも取られたくないなら、ちゃんと掴まえておけよ」

「マキちゃん？」

「だから、マキって呼ぶなっの」

見上げる悟の頭を撫でた。柔らかな髪が真紀の指に絡まり、解けていく。

「悟、好きだよ」

真紀は涙をぼろぼろ流す悟を抱き締めた。その身体は子供の時より成長していて、当たり前だ

けど大人の男を感じた。

「真紀……」

耳元で名前を囁かれて、頬が熱くなった。

この熱を、きっと一生忘れない。

こんなに愛おしいと思った事を、絶対に忘れない。